

島本町文化財調査報告書

第 54 集

広瀬遺跡発掘調査報告

令和 6 年 3 月

島本町教育委員会

序 文

本書は、宅地造成工事に伴い原因者負担で実施した広瀬遺跡の調査成果をまとめたものです。当調査では、鎌倉時代の遺構・遺物の存在を確認しました。特に、溝跡からは、多くの土器類が出土しました。これらの遺物は、今後、本町の鎌倉時代の様相を知る一端となる資料かと考えます。

このような成果を得られましたのも、工事事業者、土地所有者の方々、そして調査地近隣および関係諸機関の皆様のご理解とご協力をいただいたからこそ成し得たものです。改めてここに深く感謝しお礼を申し上げますとともに、本町の文化財保護行政に対し、今後とも、変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

令和6年3月

島本町教育委員会
教育長 中村 りか

例 言

1. 本書は、大阪府教育庁文化財保護課の指導のもと、令和元年度～令和2年度に原因者負担で島本町教育委員会が実施した広瀬遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、島本町教育委員会事務局教育子ども部生涯学習課職員 木村友紀を担当者とし、調査は令和2年3月11日に着手し、令和2年4月23日に終了し、島本町立歴史文化資料館整理室で引き続き整理調査及び報告書作成業務を実施し、令和6年3月31日に本書の刊行を以って完了した。
3. 調査及び整理作業にあたっては、下記の調査員及び調査補助員の参加を得た。(順不同)

【調査員】 能勢 麻由佳 坂根 瞬
原 由美子

- 【調査補助員】 布施 英子 眞子 悠乃
宮田 和茂 小出 匡子 迫田 圭一郎
4. 本書の執筆は木村が行い、作成・編集は木村・坂根が行った。
 5. 本調査に関わる資料の保管と活用及び本調査によって作成された資料などの管理は、島本町教育委員会がこれにあたる。

凡 例

1. 本書に用いた標高は、東京湾平均海面(T.P. [Tokyo Peil])を基準とした数値である。方位は、国土地標第IV系における座標北である。
2. 土層断面図の土色は、小山正忠・竹原秀夫編『新版標準土色帖』第12版を使用した。
3. 遺構記号については、以下の通りである。
P：ピット S D：溝 S K：土坑
S X：不明土坑

目次

序文・例言・凡例	
目次・挿図目次・付表・図版目次	
第1章 島本町地理的概要と歴史的環境	1
第2章 調査の概要	2
第1節 調査経過	2
第2節 層位	3
第3節 検出遺構	3
1. 第1遺構面	3
2. 第2遺構面	6
第4節 出土遺物	9
第5節 まとめ	12

挿図目次

第1図 調査地位置図 (1/2,500)	2
第2図 調査区断面図 (1/40)	4
第3図 第1遺構面平面図 (1/250)	5
第4図 P 21・S K 05 (1/50)	6
第5図 S K 44 (1/50)	6
第6図 第2遺構面平面図 (1/250)	7
第7図 P 323・S K 304・S K 305 (1/50)	8
第8図 P 330・P 331 (1/50)	8
第9図 P 348 (1/50)	8
第10図 S D 305 (1/50)	9
第11図 S K 301 (1/50)	9
第12図 S K 302 (1/50)	10
第13図 S K 315 (1/50)	10
第14図 出土遺物実測図 (1/4)	11

付表

付表1 報告書抄録	12
-----------	----

図版目次

図版一	第1遺構面全景 (北から)
1	第1遺構面全景 (北から)
図版二	第2遺構面全景 (北から)
1	第2遺構面全景 (北から)
図版三	2区第1遺構面・第2遺構面全景(東から)
1	2区第1遺構面全景 (東から)
2	2区第2遺構面全景 (東から)
図版四	第1遺構面・第2遺構面全景 (南から)、第1遺構面検出遺構
1	第1遺構面全景 (南から)
2	第2遺構面全景 (南から)
3	P 21 遺物出土状況 (南から)
4	S K 02 (南から)
5	S K 05 (西から)
6	S K 39 (東から)
図版五	第1遺構面・第2遺構面検出遺構
1	S K 44 (東から)
2	P 323 (西から)
3	P 330・P 331 (南から)
4	P 348 (西から)
5	S K 301 (東から)
6	S K 302 (東から)
7	S K 304 (南から)
8	S K 305 (東から)
図版六	第2遺構面検出遺構
1	S K 315 (南から)
2	S K 315 遺物出土状況 (南から)
3	S D 305 西壁
4	S D 305 遺物出土状況 (南から)
5	S D 305 (東から)
図版七	出土遺物 (一)
図版八	出土遺物 (二)

第1章 島本町の地理的概要と歴史的環境

島本町は、大阪府の北東端部、京都府との境に位置し、その東側は北から京都府京都市、長岡京市、大山崎町、八幡市と、西側は大阪府高槻市、南端は大阪府枚方市と隣接する。町域は、概ね南北約7km、東西約4kmの範囲に南北に細長く広がり、面積は約16.81km²となる。

その地形は、町域の西から北側が山地・丘陵地、東から南側は平野部となるが、山地・丘陵地が町域の約7割を占めている。島本町史によると、山地部は北摂山地の東端に当たり、中でも京都盆地と接して南北走る山地部を西山山塊とよび、西山山塊のうち町域の北側にはポンポン山山地が連なり、その南東側に一段低い天王山山地がある。

本町南東の山崎狭隘においては、京都盆地から流れ込む桂川、宇治川、木津川の三川が合流し、淀川となって大阪平野を西流するが、本町には、淀川のほか、山地・丘陵地を源とする水無瀬川、善峰川、滝谷川、鈴谷川、越谷川、八幡川、西谷川等の河川があり、水無瀬川を除いては、山地・丘陵部から短く平野部に流れ出るといふ小規模なものが多い。

島本町は、古代の国郡制においては摂津国島上郡に属するが、東は山城国に接し、その地勢から島本は交通の要衝となっていた。南に流れる淀川は水運の重要な交通路であり、特に長岡京・平安京遷都以降はその重要性は増していく。平安時代、山崎（大山崎町域も含め）には津が整備され、また遡る奈良時代には架橋もされる。水運ばかりでなく、淀川と丘陵部との間に挟まれた平野部上においては、平安京と西国を結ぶ山陽道（西国街道）が通り、陸路においても重要な幹線路が貫いていた。すでに奈良時代においても、平城京と西国とを結ぶ幹線道路上に駅伝制の駅が置かれ、島本付近には大原駅が設置されたと考えられている。

本書で報告する広瀬遺跡は、縄文時代から近世にかけての複合遺跡であり、古くは縄文時代晩期の竪穴式建物跡が確認され、弥生時代、古墳時代の遺構・遺物も検出されているが、平安時代以降、確認される遺構・遺物の量は増大する。西国街道沿いでの発掘調査では、小石敷きの路面をもつ中世の道路状遺構が検出されており、そこでは平安時代の遺物も出土していることから、その整備が古代にまで遡る可能性が指摘されている。

また、平安時代から鎌倉時代にかけて、天皇や貴族が度々遊行に水無瀬の地を訪れている。桓武天皇や嵯峨天皇は遊獵を好み、文徳天皇の子である惟喬親王はこの地に御殿を築いたという。広瀬遺跡においては平安時代前期の建物跡群を検出されているが、これは惟喬親王の水無瀬離宮関連施設の可能性がある。また、鎌倉時代には、後鳥羽上皇が正治元（1199）年に水無瀬離宮を造営している。この水無瀬離宮は建保4（1216）年の洪水で倒壊したが、翌年には丘陵上に再建されたという。広瀬遺跡では、後鳥羽上皇の水無瀬離宮に関連するものと考えられる建物跡や所用瓦が検出されており、広瀬遺跡の南西丘陵上にある西浦門前遺跡では、庭園跡と考えられる遺構が検出されている。

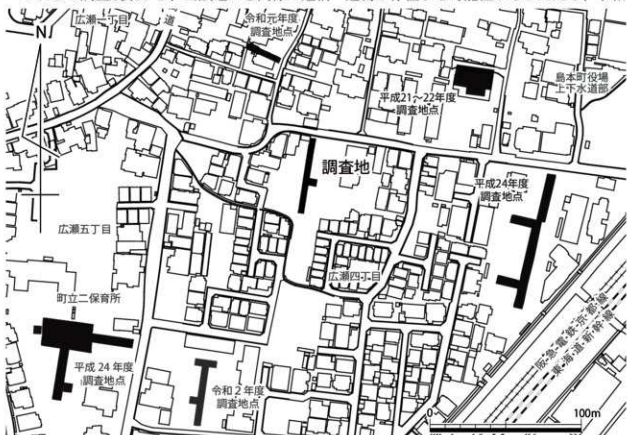
第2章 調査の概要

第1節 調査経過（第2図）

当該地は、複合遺跡である埋蔵文化財包蔵地「広瀬遺跡」の範囲内であり、宅地造成工事が計画されていたため、文化財保護法第93条第1項の規定により、事業主より「埋蔵文化財発掘の届出」が提出され、大阪府教育委員会教育長の指示に基づき、発掘調査を実施したものである。

広瀬遺跡内では、多くの調査を実施しており、当該地周辺でも平成24年度、平成26年度、令和元年度に発掘調査を実施している。当該地から南西約150mの地点で実施した平成24年度の発掘調査では、平安時代の建物跡群や溝跡などが見つかった。これらの遺構は、この溝跡の埋土内から平安時代前期の緑釉陶器などの高級食器類も出土していることから、惟喬親王の水無瀬離宮跡に関する遺構の可能性が考えられた。東約150mの地点で実施した平成24年度の発掘調査では、縄文時代晩期の竪穴建物跡や石器工房跡などの遺構が見つかった。南約200mの地点で実施した平成26年度の発掘調査では、弥生時代～古墳時代の遺構・遺物が見つかった。北西約60mの地点で実施した令和元年度の発掘調査では、平安時代～鎌倉時代の遺構・遺物が見つかった。

これらの調査成果から、当該地にも同様の遺構・遺物が存在する可能性があったため、令和



第1図 調査地位圈図 (1/2,500)

2年2月3日から令和2年2月5日まで確認調査を実施し、遺構・遺物の存在の有無を確認した。その結果、2期の遺構面を確認した。出土遺物は小破片であり、詳細な年代を特定することはできなかったが、両遺構面ともに中世に属するものと考えられた。そのため、遺構の性格や広がりの確認、時代の特定などのために、2期の遺構面を第1遺構面及び第2遺構面として平面的に調査することとした。

発掘調査は、宅地造成工事の道路部分 289.3m²を対象として、令和2年3月11日から令和2年4月23日まで実施した。

調査区は南北に長く、東側に張出し部を持つ「T」字型であるが、北端から張出し部までを1区、張出し部とその面する部分を2区、張出し部から南端までを3区と地区分けして、調査を行った。本書においても、同様に呼称することとする。

第2節 層位 (第3図)

本調査地の基本層序としては、黒褐色粘砂土の耕作土である第1層が約20cmの厚さで堆積し、調査区南側においては第1層の下層に黄灰色粘砂土の耕作土である第2層が約5cmで堆積する。調査区北側においては第1層直下、調査区南側においては第2層直下に褐色シルト層の耕作土の床土と考えられる第6層が堆積する。

この第6層直下において、遺構の存在を確認したため、第1遺構面として取り扱うこととした。第1遺構面の基盤層は、暗灰黄色砂粘土の第16層、暗灰黄色砂礫土の第17層、褐色砂粘土の第22層、褐色砂礫土の第24層、褐色砂粘土の第25層、暗灰黄色砂礫土の第28層、黄灰色砂粘土の第29層で構成されるが、水平堆積しておらず、この地が洪水などの影響を強く受けた場所であることがうかがえる。

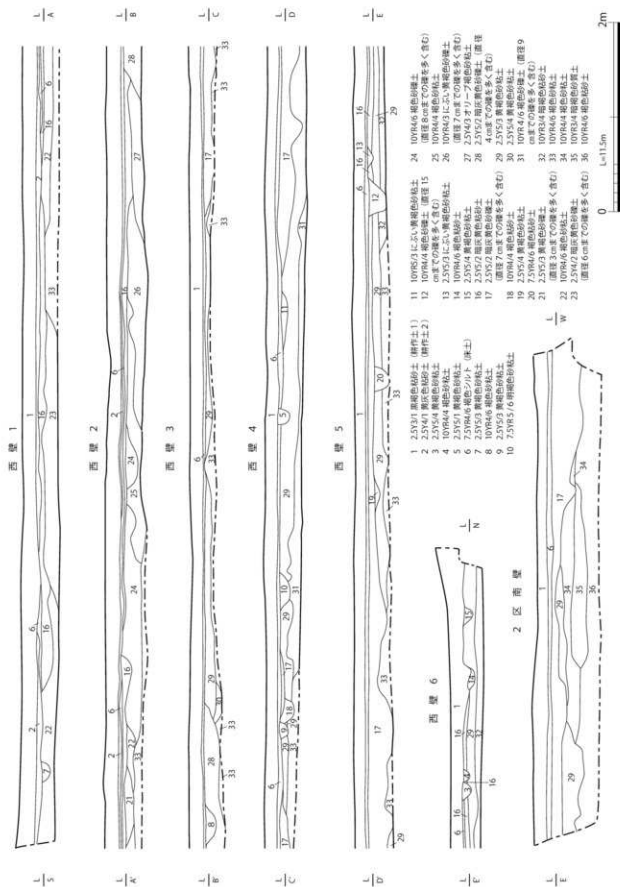
第1遺構面よりも下層で、比較的安定しているのは褐色砂粘土の第33層である。この第33層直上において遺構の存在を確認したため、これを第2遺構面として取り扱うこととした。第1遺構面から出土した遺物の年代と第2遺構面から出土した遺物の年代差はなく、両遺構面ともに鎌倉時代中頃から後半頃のものが出土しており、第1遺構面の時期に生活面として利用されていたが、洪水などの影響により土砂が堆積したものの、まもなく再度生活面として利用されたものと思われる。

第2遺構面より下層は、比較的安定しているものの、明らかな遺構・遺物の存在は確認できなかった。

第3節 検出遺構

1. 第1遺構面 (第3図、図版一、図版三-1、図版四-1)

第1遺構面の遺物包含層は確認できず、耕作土及び床土直下で検出している。ピット、溝、土坑などの遺構が多く見つかっており、ピット約100基、溝約200条、土坑約50基を確認



第2図 調査区断面図 (1/40)

しているが、建物等と考えられるような遺構は確認できなかった。耕作土及び床土直下ということもあり、近現代の耕作痕と考えられる溝なども多く見つかっている。特に、2区・3区においては、耕作痕が多く、幅約10cmの西に約30度振る溝と東に約8度振る溝を多く検出した。1区においては、鋤溝と考えられる幅約20cmの東に8度振る溝を検出した。

遺構に伴わない遺物としては、土師器、須恵器、瓦器、国産陶器、青磁などが出土した。
P 21 (第4図、図版四-3)

3区中央付近で検出したピットであり、南北幅約80cm、東西幅約50cm、深さ約15cmの楕円形のものである。

埋土内からは、土師器皿(図14-3)、瓦器椀・羽釜、須恵器などが出土しているが、特に土師器皿は完形のものが出土している。
SK 02 (図版四-4)

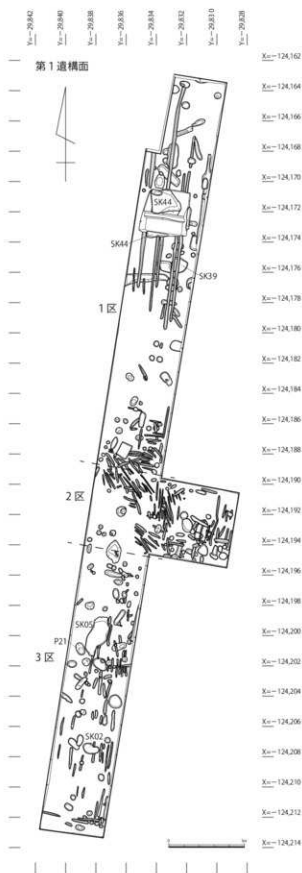
3区南側で検出した土坑であり、南北幅45~70cm、東西幅約110cm、深さ約30cmの不整形のものである。

埋土内からは、土師器皿・甕、須恵器甕(図14-17)、瓦器椀(図14-7)・羽釜などが出土しているが、特に瓦器椀は完形のものが出土している。

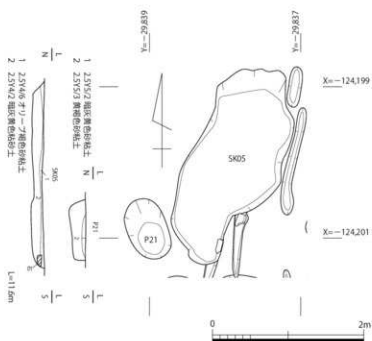
SK 05 (第4図、図版四-5)

3区中央付近で検出した土坑であり、南北幅約270cm、東西幅約110cm、深さ約15cmの不整形のものである。

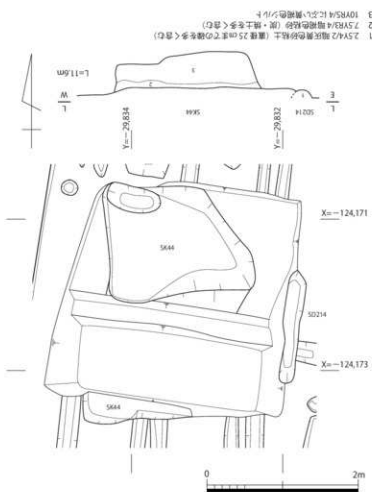
埋土内には、遺物を多く含み、土師器、須恵器鉢(図14-20)、瓦器椀(図14-8)・



第3図 第1遺構面平面図 (1/250)



第4図 P 21・S K 05 (1/50)



第5図 S K 44 (1/50)

鍋(図14-18)・羽釜(図14-19)、白磁、軒丸瓦(図14-21)などの遺物がコンテナ2箱分出土している。

S K 39 (図版四-6)

1区中央付近で検出した土坑であり、南北幅約100cm、東西幅約100cm、深さ約25cmの円形のものである。

埋土内からは、土師器、瓦器、金属などが出土している。

S K 44 (第5図、図版五-1)

1区北側で検出した土坑であり、南北幅約320cm、東西幅150~200cm、深さ約50cmの不整形のものである。

埋土内からは、土師器、瓦器などの遺物以外に、極大の礫や炭、被熱した粘土塊が多く出土しており、耕作時に出てきた礫や焼却時に出た炭を集積するために利用されたものと考えられる。

2. 第2遺構面(第6図、図版二、図版三-2、図版四-2)

第2遺構面は、第1遺構面よりも遺構の密度が低いものの、ピット53基、溝5条、土坑、ピット54基、溝4条、土坑16基を検出したが、建物等と考えられるような遺構は確認できなかった。

遺構に伴わない遺物としては、土師器・瓦器・国産陶器などが出土し

た。

P 323 (第7図、図版五-2)

3区北側で検出したピットであり、直径約25cm、深さ約10cmの円形のものである。

埋土内からは、土師器の小片と多くの炭が出土している。

P 330・P 331 (第8図、図版五-3)

2区北東隅で検出した2つのピットであり、P 331の埋土(第9図第5層)がP 330の埋土(第9図第6層)を切っている状況を確認できた。P 331の底付近には、上面が平らな石が置かれてあり、柱穴の可能性もある。

P 330の埋土からは、土師器が出土し、P 331の埋土からは土師器、瓦器が出土している。

P 348 (第9図、図版五-4)

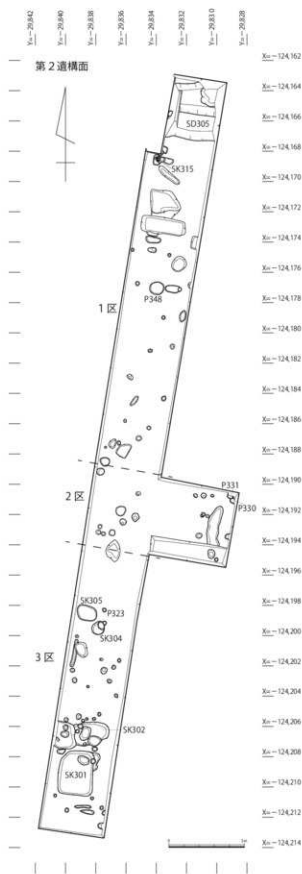
1区中央付近で検出したピットであり、直径約90cm、深さ約110cmの円形のものである。素掘り井戸の可能性もあるが、底付近の土層も安定しており、水が浸透する様子もなく、用途は不明である。

埋土内から、遺物は出土していない。

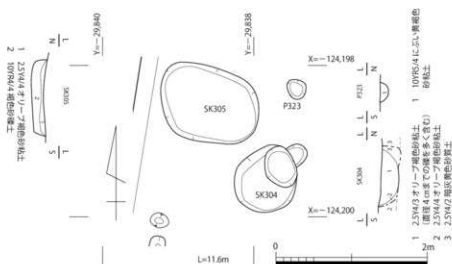
S D 305 (第10図、図版六-3~5)

1区北端で検出した溝であり、南北幅約390cmで、東西方向に走るものであるが、調査区と直交して見つかったため、長さは330cm以上としか判明しなかった。第10図第6層及び第7層直下がS D 305の底であるが、第7層より下層も溝状の堆積をしており、同位置に幾度も溝が形成されているものと思われる。

今回の調査で検出した遺構の中でも、S D 305から出土した遺物の量が最も多く、コンテナ5箱分を数える。土師器皿(図14-1・



第6図 第2遺構面平面図(1/250)



第7図 P 323・SK 304・SK 305 (1/50)

2・5・6)、瓦器椀(図14-9・10・12・13)が多く、完形品も多数出土している。他には、須恵器鉢、瓦器羽釜、青磁などが出土している。特に、北岸付近から多く出土していることから、S D 305より北側に存在した集落から投棄されたものと考えられる。

SK 301 (第11図、図版五-5)

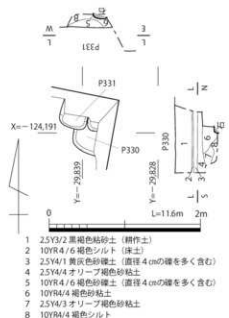
3区南側で検出した土坑であり、南北幅約300cm、東西幅約230cm、深さ約20cmの方形のものである。

埋土内には、遺物を多く含み、土師器皿、須恵器鉢・甑、瓦器椀・鍋・羽釜、国産陶器、白磁碗(図14-15)、金属などが出土している。

SK 302 (第12図、図版五-6)

3区南側で検出した土坑であり、南北幅約150cm、東西幅約230cm、深さ約20cmの楕円形のものである。

埋土内には、遺物を多く含み、土師器皿・羽釜、須恵器鉢・甑(図14-16)、瓦器皿・椀・鍋・羽釜、青磁碗(図14-14)などが出土している。



第8図 P 330・P 331 (1/50)

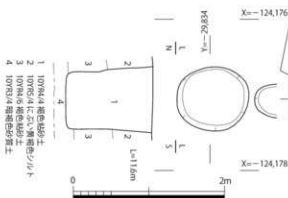
SK 304 (第7図、図版五-7)

3区北側で検出した土坑であり、直径約80cm、深さ約25cmの円形のものである。

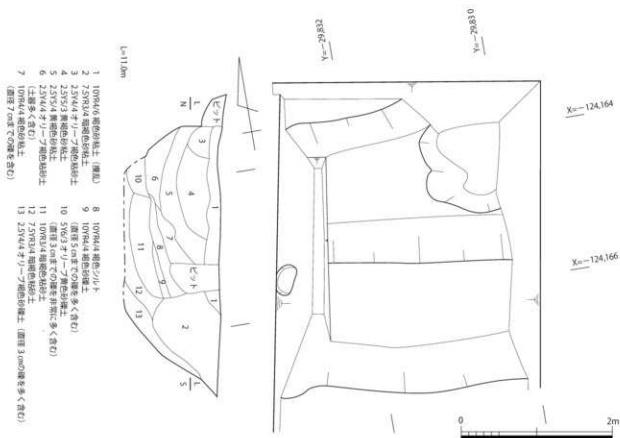
埋土内には、遺物を多く含み、土師器皿、須恵器鉢、瓦器椀(図14-11)・鍋・羽釜などが出土している。

SK 305 (第7図、図版五-8)

3区北側で検出した土坑であり、南北約100cm、東西幅約140cm、深さ約15cmの楕円



第9図 P 348 (1/50)



第10図 SD 305 (1/50)

形のものである。

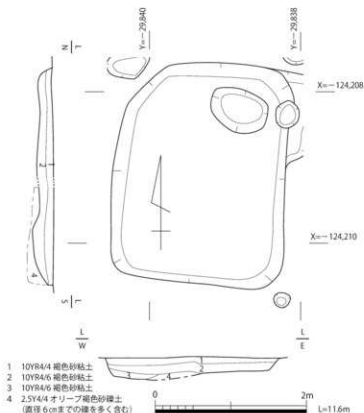
埋土内からは、土師器皿(図14-4)、瓦器椀などが出土している。SK 315(第13図、図版六一・2)

1区北側で検出したビットであり、南北約40cm、東西幅約60cm、深さ約25cmの楕円形のものである。

埋土内からは、土師器皿(図14-4)、瓦器などが出土しているが、特に土師器皿は、ほぼ完形のもの8点出土している。

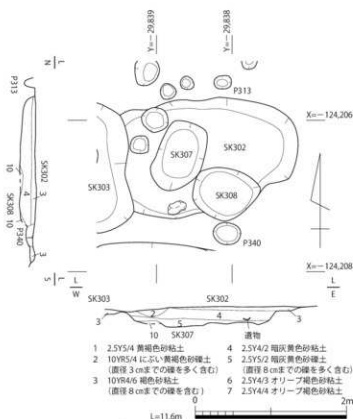
第4節 出土遺物

当該調査においては、土師器・須恵器・瓦器・白磁・青磁・瓦などの遺物が出土しており、コンテナ33箱分を数える。

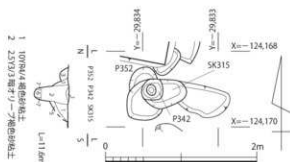


第11図 SK 301 (1/50)

- 1 10YR4/4 褐色砂粘土
- 2 10YR4/6 褐色砂粘土
- 3 10YR4/6 褐色砂粘土
- 4 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂粘土
(直径6cmまでの罐を多く含む)



第12図 SK 302 (1/50)



第13図 SK 315 (1/50)

第14図1～6は土師器皿、7～13は瓦器碗、14は青磁碗、15は白磁碗、16・17は須恵器甕、18は瓦器の鍋、19は瓦器の羽釜、20は須恵器の鉢、21は軒丸瓦である。

1・2は小型の皿であり、1は口径8.1cm、器高1.3cm、2は口径9.2cm、器高1.4cmである。3は口径10.6cm、器高2.3cm、口縁部が外湾し、内面の一部に煤が残る。4・5は口径12.5cm前後、器高は2点ともに2.4cmのものであり、5には内外面によく煤が残る。6は器高が高いものであり、口径12.2cm、器高2.8cmである。

7～13の瓦器碗は、全てミガキが疎になり、貼付け高台の形状も退化している。7～10は比較的小型のものであり、口径10.9～12.0cm、器高3.4～4.0cmを測る。11～13は比較的大型のものであり、口径13.4～14.5cm、器高4.2～4.9cmを測る。

14の青磁碗は、口径8.8cm、器高4.5cmの小型のものである。

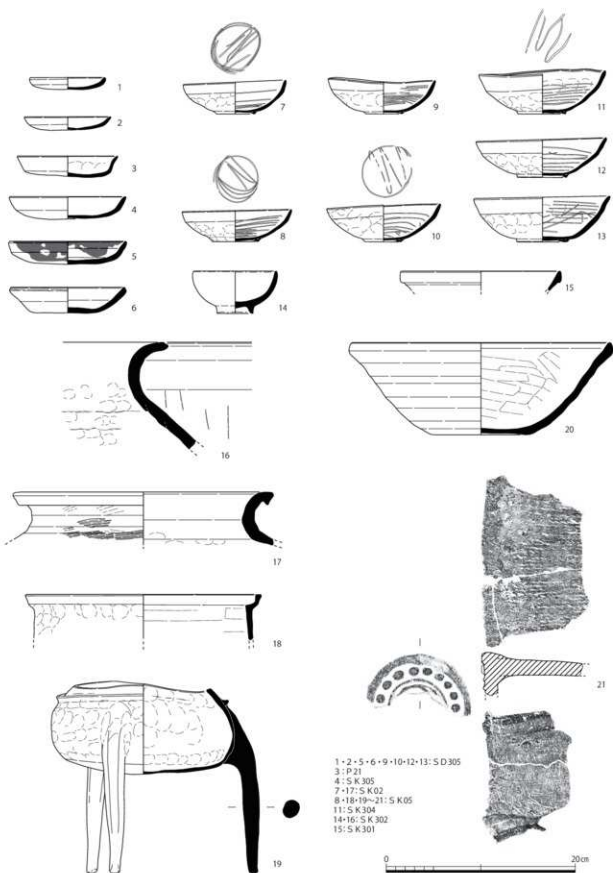
15の白磁碗は、口径の復元径17.0cmのものであり、口縁部が玉縁状のものである。

16の須恵器甕は、器高の残存高が11.3cmのものであり、体部には板ナデの痕跡かと考えられる工具痕が残る。17の須恵器甕は、口径27.6cm、器高の残存高が5.7cmのものであり、口縁部が「て」の字状を呈し、頸部付近までタタキの痕跡を残す。

18の瓦器の鍋は、口径25.0cm、器高の残存高が4.7cmのものであり、内面は板ナデ、外面は指オサエで調整され、外面にうすく煤を残す。

19の瓦器の羽釜は、三足のものであり、口径14.6cm、器高20.3cdmを測る。

20の須恵器鉢は、口径27.2cm、器高9.7cmのものであり、内面はケズリ、外面はナデにより調整されている。



第 14 图 出土遺物実測図 (1/4)

21の軒丸瓦は、瓦当文様が右巻ニツ巴文のものであり、島本町文化財調査報告書第19集にて軒丸瓦第1型式第11種として報告したものである。

出土遺物の年代は、第1遺構面・第2遺構面から出土した遺物ともに、鎌倉時代中頃から後半頃のものであるが、14・15の陶磁器や21の軒丸瓦は平安時代末頃から鎌倉時代前半のものである。

第5節 まとめ

当調査においては、鎌倉時代中頃～後半頃と考えられるピット・溝・土坑などの遺構を多数確認した。令和2年度の尾山遺跡の発掘調査、令和4年度の越谷遺跡の発掘調査で鎌倉時代後半頃に、桜井地区が大きく開発されている状況が見て取れたが、今回の調査でも、同時期の集落の存在を示唆するような遺構・遺物の存在を確認することができた。今回の調査においては、建物などの遺構は確認できなかったが、SD305の出土遺物が北側から投棄されていることから、集落も当調査地より北側に存在した可能性がある。

承久の乱後の本町周辺の支配体制は、文献が僅少であり、判然としないが、本町の歴史に大きな影響を与えたものとする。今回の調査は、その解明の手掛かりとなる重要な成果の一つと考える。

付表1 報告書抄録

ふりがな	しまもとちょうぶんがざいちょうさほうこくしょ
書名	島本町文化財調査報告書
副書名	広瀬遺跡発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	島本町文化財調査報告書
シリーズ番号	第54集
編著者名	木村 友紀、坂根 嗣
編集機関	島本町教育委員会事務局 教育こども部 生涯学習課
所在地	〒618-8570 大阪府三島郡島本町桜井二丁目1番1号 TEL.075-961-5151
発行年月日	令和6年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号				(㎡)	
遺跡範囲								
ひろせいせき 広瀬遺跡 (H S 19-3 内街道)	しまもとちょうひろせい 島本町広瀬四丁目 594番1、595番1	27301	14	34° 52' 45"	135° 40' 09"	2020.3.11 ～ 2020.4.23	289.3	宅地造成工事に 伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ひろせいせき 広瀬遺跡 (H S 19-3 内街道)	集落	鎌倉時代	ピット・溝・ 土坑	土師器・須恵器・ 瓦器・瓦・国産 陶器・輸入陶磁 器	鎌倉時代の溝に土師器・瓦器が投棄され ている状況を確認した。

图 版



1 第1遺構面全景（北から）



1 第2遺構面全景（北から）



1 2区第1遺構面全景（東から）



2 2区第2遺構面全景（東から）



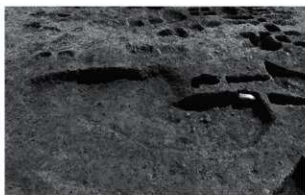
1 第1遺構面全景（南から）



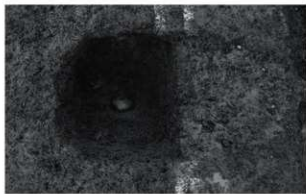
2 第2遺構面全景（南から）



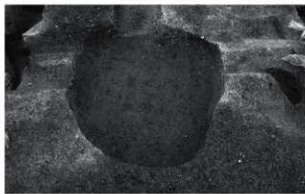
3 P 21 遺物出土状況（南から）



5 SK 05（西から）



4 SK 02（南から）



6 SK 39（東から）



1 SK 44 (東から)



5 SK 301 (東から)



2 P 323 (西から)



6 SK 302 (東から)



3 P 330・P 331 (南から)



7 SK 304 (南から)



4 P 348 (西から)



8 SK 305 (東から)



1 SK 315 (南から)



3 SD 305 西壁



2 SK 315 遺物出土状況 (南から)



4 SD 305 遺物出土状況 (南から)



5 SD 305 (東から)





島本町文化財調査報告書 第54集

発行 島本町教育委員会
〒618-8570 大阪府三島郡島本町桜井二丁目1番1号
☎075-964-5151

発行日 令和6年3月31日

印刷 三星商事印刷株式会社
〒602-8358 京都市上京区七本松通下長者町下丸三番町273番
☎075-467-5151